

育英短期大学幼児教育研究所紀要 第15号 (抜刷)

保育者の困り感と研修内容の要望について  
— 幼稚園免許更新講習受講者へのアンケート調査の分析 —

柳 晋・星野 真由美・栗山 宣夫

A Study on Childcare Workers Difficulties and Demands for Training : Analysis of  
Questionnaire Survey on Participants of Courses for Renewing Kindergarten Teaching License:

Susumu YANAGI

Mayumi HOSHINO

Nobuo KURIYAMA

# 保育者の困り感と研修内容の要望について

## —幼稚園免許更新講習受講者へのアンケート調査の分析—

柳 晋 星 野 真由美 栗 山 宣 夫

### I はじめに

教員免許更新制度がスタートし、8年が経過する。平成20年度中の試行となる予備講習の開始年度も含めれば全国版の公開講座としては規模的に大きな着座位置を獲得している。さて、この制度がここまで定着するには追い風としての要因がある。

一つに現任者に課せられている期限付きの講座であることから、よほどの不具合な理由が生じない限り定められた期限内に実現させようとする当該現任者の意識が前向きに働いたことである。現任者にとって、2年間の中で30時間を工面すること自体、それなりの覚悟や動機づけが必要になっていることも確かである。制度が本格的に始動した当時、平成23年度に35歳・45歳・55歳になる者が教諭として在籍していた学校(園)では、制度そのものを熟知しながら、教職員への周知を徹底した。その上、30時間を分散して受講していくのか、それともある程度の期間に集中して受講するのか、こうした前例がないことから、現場での「やりくり」に苦慮した経緯をもつ事業所も少なくなかったと思う。

しかし、教育者の専門性の中に、実践の「質」が問われる以上、一抹の不安を抱きながらも12時間の必修科目も18時間の選択科目も「職務に就く上での義務」として、一括りでその責を全うしなければならない。しかし、こうした機会は更新後の受講認定によって「継続する許可」が与えられるという、単なる関門なのであろうか。たしかに、職場の同僚性を育む上では受講前9年間の成果を称え、労いの機会でもある。言わば10年という長

期のスパンを共通項にして、これまでに蓄積したキャリアを俯瞰し、初心に戻りながら時代性と専門性を上書きする、自身の教育観を再認識することからもフォーマルな研修と読み替えられる。

二つ目として、子ども・子育て支援新制度(以後、新制度と表記)の施行に伴う、幼保連携型認定こども園への移行が急速に増えたことがあげられる。既存の幼稚園から移行する場合、在職者はすでに幼稚園教諭免許状と保育士資格を併せて取得していることが多いことから、教員免許更新については、その時期を迎えれば想定された個人的義務と受け止めている。そのために、精神的負担は先輩教員や同僚の受講した際の情報からかなり少なくなりつつある。

しかし、保育所(園)からの移行では、本来3歳未満児の受け入れを前提にした事業所が多く、担当者の資格等の要件が真っ先に影響してくる。要するに、最終期限から換算して33歳・43歳・53歳を迎える現任者が、これまで眠っていた教員免許を活かさなければならない事態が発生する。いわゆる保育教諭と呼ばれる人材に対する需要が増加するためである。それと同時に、前述した幼児教育の質を支える優秀な幼稚園の人材確保が喫緊の課題となっていることから、「質と量」の両面から教育的ニーズに応える社会的責務が求められることになる。実際に、本短期大学のこれまでの免許更新講習では、地方における保育者養成機関として、幼児教育や保育内容に特化したカリキュラムを提供していることから、実践現場と密着して、こうした急激な増加やニーズに対する影響を真正面から受け入れることになる。

現在、国の課題認識として、新制度の施行によるところが大きいことは示されており、幼稚園、保育所、認定こども園を通した幼児教育の質向上がこれまで以上に求められていることが現場意識と合致している。また、「質の高い幼児教育を実施するにあたり、保育を担う幼稚園教諭等の資質向上が極めて重要であり、研修の受講等を通じて不断に資質向上に取り組むことの必要性」も求められている。

平成26年2月のベネッセ教育総合研究所の「第2回幼児教育・保育に関する基本調査報告書」の出典によると、幼児教育施設における保育実践上、運営上の最重要課題は、国公立幼稚園、公立保育所、私立保育所、そして認定こども園のいずれもが「保育者の資質の維持、向上」が2位を離して1位となっている。私立幼稚園においては1位が「新たな園児の獲得」(19.8%)であるものの、2位が「保育者の資質の維持、向上」(18.1%)であり、1位と2位の標本値としての差は殆どない。これは規模の大小に関係なく、適当な集団性が必要である幼稚園の運営上の特質を踏まえての結果であり、全体としての1位の座を揺さぶる要因ではないと思われる。以上からも、「保育者の資質の維持、向上」は幼稚園、保育所、認定こども園いずれにおいても保育実践上、並びに運営上における最も重要な課題と認識されており、国の課題認識と乖離していないことがわかる。

育英短期大学では平成21年度より「幼稚園免許状更新講習」を開始し、認定こども園への移行が始まったここ1、2年は200名を超える参加者がある。本論では、この参加者に協力してもらったアンケート調査をもとに、更新講習に参加する現場の保育者たちが現在困っていること、「困り感」を検証することと、保育者がどのような学び直しをしたいと感じているかという現場のニーズを検証することを目的とする。それらを通じて育英短期大学幼児教育研究所の研究や活動が、今後更に関係機関と連携した地域支援につながることを

を目指す。

## II 調査の方法

本調査は、平成28年度育英短期大学で実施された「幼稚園免許状更新講習」の参加者257名に協力を依頼し、日々の教育・保育の現場で困っていることについて、研修などで学んでみたいことについてのアンケート調査を行った。

対象者：免許更新の必修科目を受講した257名。

性別、年齢は表1を参照。

調査方法：平成28年8月10日、免許更新講習の必修科目終了後にアンケート調査を実施し回収した。参加者全員より回答の協力を得られた。

アンケート内容は、記入者の属性に関する項目：1. 性別、2. 年齢、3. 所属機関①（公立／私立）、4. 所属機関②（幼稚園／認定こども園／保育園）、5. 勤務年数（1年未満／1年以上5年未満／5年以上10年未満／10年以上15年未満／15年以上20年未満／20年以上25年未満／25年以上30年未満／30年以上）（以下、「5～10年」のように記す）、6. 役職・担当（クラス担任／園長／副園長・教頭／主幹・主任／フリー／その他）と、質問項目1『日々の教育・保育の現場の中で困っていることについて』、質問項目2『研修などで今後学んでみたいことについて』である。質問項目1、2については17の選択項目からあてはまるもの全てを選択してもらい、複数選択の方法をとった。選択項目の内容に関しては、これまでの幼児教育研究所のリカレント講座参加者のアンケート結果を反映させて作成した。本調査の結果は全体の単純集計、及び質問項目と参加者の属性とのクロス集計を実施した。

表1 アンケート結果 単純集計表

育英短期大学幼児教育研究所アンケート  
単純集計表

1. ご自身について教えてください。

回答者数 257名

性別

No.	カテゴリー名	n	%
1	女性	249	96.9%
2	男性	4	1.6%
	不明	4	1.6%
	全体	257	100.0%

年齢

No.	カテゴリー名	n	%
1	20代	0	0.0%
2	30代	111	43.2%
3	40代	102	39.7%
4	50代	41	16.0%
5	60代	1	0.4%
6	その他	0	0.0%
	不明	2	0.8%
	全体	257	100.0%

所属①

No.	カテゴリー名	n	%
1	公立	48	18.7%
2	私立	169	65.8%
	不明	40	15.6%
	全体	257	100.0%

所属②

No.	カテゴリー名	n	%
1	幼稚園	46	17.9%
2	認定こども園	104	40.5%
3	保育園	80	31.1%
4	その他	8	3.1%
	不明	19	7.4%
	全体	257	100.0%

勤続年数

No.	カテゴリー名	n	%
1	1年未満	1	0.4%
2	1年以上5年未満	13	5.1%
3	5年以上10年未満	41	16.0%
4	10年以上15年未満	90	35.0%
5	15年以上20年未満	53	20.6%
6	20年以上25年未満	32	12.5%
7	25年以上30年未満	8	3.1%
8	30年以上	9	3.5%
	不明	10	3.9%
	全体	257	100.0%

役職・担当（複数可）

No.	カテゴリー名	n	%
1	クラス担任	163	63.4%
2	園長	1	0.4%
3	副園長・教頭	2	0.8%
4	主幹・主任	22	8.6%
5	フリー	38	14.8%
6	その他	54	21.0%
	不明	8	3.1%
	全体	288	112.1%

**育英短期大学幼児教育研究所アンケート  
単純集計表**

クラス担任 担当年齢（複数可）

No.	カテゴリー名	n	%
1	0歳児	22	8.6%
2	1歳児	44	17.1%
3	2歳児	37	14.4%
4	3歳児	31	12.1%
5	4歳児	19	7.4%
6	5歳児	13	5.1%
	不明	2	0.8%
	非該当	94	36.6%
	全体	262	101.9%

2. 日々の教育・保育の中で困っていることについて（複数可）

No.	カテゴリー名	n	%
1	保育・幼児教育というものをどう考えるか(それをふまえた実践のあり方について)	50	19.5%
2	子どもの発達について	80	31.1%
3	障がいをもつ子どもについて	117	45.5%
4	行動が気になる子への支援のあり方について	213	82.9%
5	保育活動、教育活動の計画や省察について	30	11.7%
6	幼児理解のあり方や支援のあり方について	69	26.8%
7	保育に関わる実技的スキル(音楽・美術・体育)	54	21.0%
8	野外活動や自然体験的活動をおこなう上での知識や技能について	18	7.0%
9	児童文化(絵本、人形遊び、劇遊び等)について	19	7.4%
10	行事について	33	12.8%
11	虐待又は虐待を疑われる子どもや家族について	36	14.0%
12	子どもの病気について(学校感染症やアレルギー等)	75	29.2%
13	乳児について	26	10.1%
14	基本的な生活習慣について	49	19.1%
15	保護者との関わり方について	126	49.0%
16	職員間の学びあいについて	44	17.1%
17	教職員間の人間関係について	63	24.5%
18	その他	7	2.7%
	不明	2	0.8%
	全体	1111	432.3%

3. 研修などで学んでみたいことについて（複数可）

No.	カテゴリー名	n	%
1	保育・幼児教育というものをどう考えるか(それをふまえた実践のあり方について)	58	22.6%
2	子どもの発達について	94	36.6%
3	障がいをもつ子どもについて	154	59.9%
4	行動が気になる子への支援のあり方について	211	82.1%
5	保育活動、教育活動の計画や省察について	31	12.1%
6	幼児理解のあり方や支援のあり方について	74	28.8%
7	保育に関わる実技的スキル(音楽・美術・体育)	95	37.0%
8	野外活動や自然体験的活動をおこなう上での知識や技能について	34	13.2%
9	児童文化(絵本、人形遊び、劇遊び等)について	62	24.1%
10	行事について	29	11.3%
11	虐待又は虐待を疑われる子どもや家族について	40	15.6%
12	子どもの病気について(学校感染症やアレルギー等)	82	31.9%
13	乳児について	36	14.0%
14	基本的な生活習慣について	38	14.8%
15	保護者との関わり方について	110	42.8%
16	職員間の学びあいについて	37	14.4%
17	教職員間の人間関係について	37	14.4%
18	その他	5	1.9%
	不明	2	0.8%
	全体	1229	478.2%

### Ⅲ 結果と考察

#### 結果 1. 全体の結果

まず、記入者の属性と質問項目に対する単純集計の結果についてみていく（表1）。記入内容が不明だった項目については説明を略す。

#### 記入者の属性

性別は、女性249名（96.9%）、男性4名（1.6%）、記入なしで不明者が4名であった。年齢については、10歳ごとに分け選択してもらったところ、20代0名、30代111名（43.2%）、40代102名（39.7%）、50代41名（16.0%）、60代1名（0.4%）と、30代、40代で8割を占めた。所属機関①については、公立48名（18.7%）、私立169名（65.8%）であった。所属機関②については、幼稚園46名（17.9%）、認定こども園104名（40.5%）、保育園80名（31.1%）であった。参加者の4割が認定こども園所属であった。勤続年数は、勤務経験を全部合わせた年数を記入してもらうようにした。1年未満：1名（0.4%）、1～5年：13名（5.1%）、5～10年：41名（16.0%）、10～15年：90名（35.0%）、15～20年：53名（20.6%）、20～25年：32名（12.5%）、25～30年：8名（3.1%）、30年以上：9名（3.5%）となった。役職・担当は、クラス担任163名（63.4%）、園長1名（0.4%）、副園長・教頭2名（0.8%）、主幹・主任22名（8.6%）、フリー38名（14.8%）であり、クラス担任が6割を超えた。次いで、フリー、主幹・主任が続いた。役職・担当の項目に関しては、その他に54名の記入があった。

#### 質問項目の結果

##### 1) 日々の教育・保育の現場の中で困っていることについて

質問項目『日々の教育・保育の現場の中で困っていることについて』に関する結果を見ていく（表1）。選択肢17項目の中で一番多く選ばれたのは、「行動が気になる子への支援のあり方につ

いて」82.9%であった。8割を超える参加者が困っていることとして選んでいる。次いで、「保護者との関わり方について」49.0%、「障がいをもつ子どもについて」45.5%であり、半数近くがこれらの項目を選択している。これら上位3項目は、次の質問項目『研修などで学んでみたいこと』でも上位に入っている。「子どもの発達について」が31.1%、「子どもの病気について」、「幼児理解のあり方や支援のあり方について」、「教職員間の人間関係について」、「保育に関わる実技的技能」の4項目が20%台で続き、残りは20%未満の選択となった。

##### 2) 研修などで学んでみたいことについて

次の質問では、参加者が研修などでどのようなことについて学んでみたいかを調査した（表1）。17項目の中で一番多く選択されたのは、「行動が気になる子への支援のあり方について」82.1%であった。『困っていること』と同様に8割を超える参加者が選んでいる。次いで、「障がいをもつ子どもについて」59.9%、「保護者との関わり方について」42.8%であった。30%台は「保育に関わる実技的技能」37.0%、「子どもの発達について」36.6%、「子どもの病気について」31.9%となり、20%台は「幼児理解のあり方や支援のあり方について」、「児童文化について」、「保育・幼児教育というものをどう考えるか」と続き、残りは20%未満の選択となった。

日々の教育・保育の現場の中で困っていることと、研修などで学んでみたいことは重なっているものが多いが、若干のズレがある項目として、困り感の方が高い項目として「教職員間の人間関係について」があり、逆に学んでみたい項目が上位になった項目としては「保育に関わる実技的技能」、「児童文化」があげられる。

結果2. 日々の教育・保育の中で困っていること  
 についてのクロス集計

次に『日々の教育・保育の中で困っていること』(以下、『困っていること』)についてのアンケート結果について、属性別にクロス集計を行った(表2)。この中で、所属機関(幼稚園:46名、認定こども園:104名、保育園:80名)ごとに、『困っていること』をクロス集計し百分率で示した結果が図1である。図2は、勤続経験年数(5

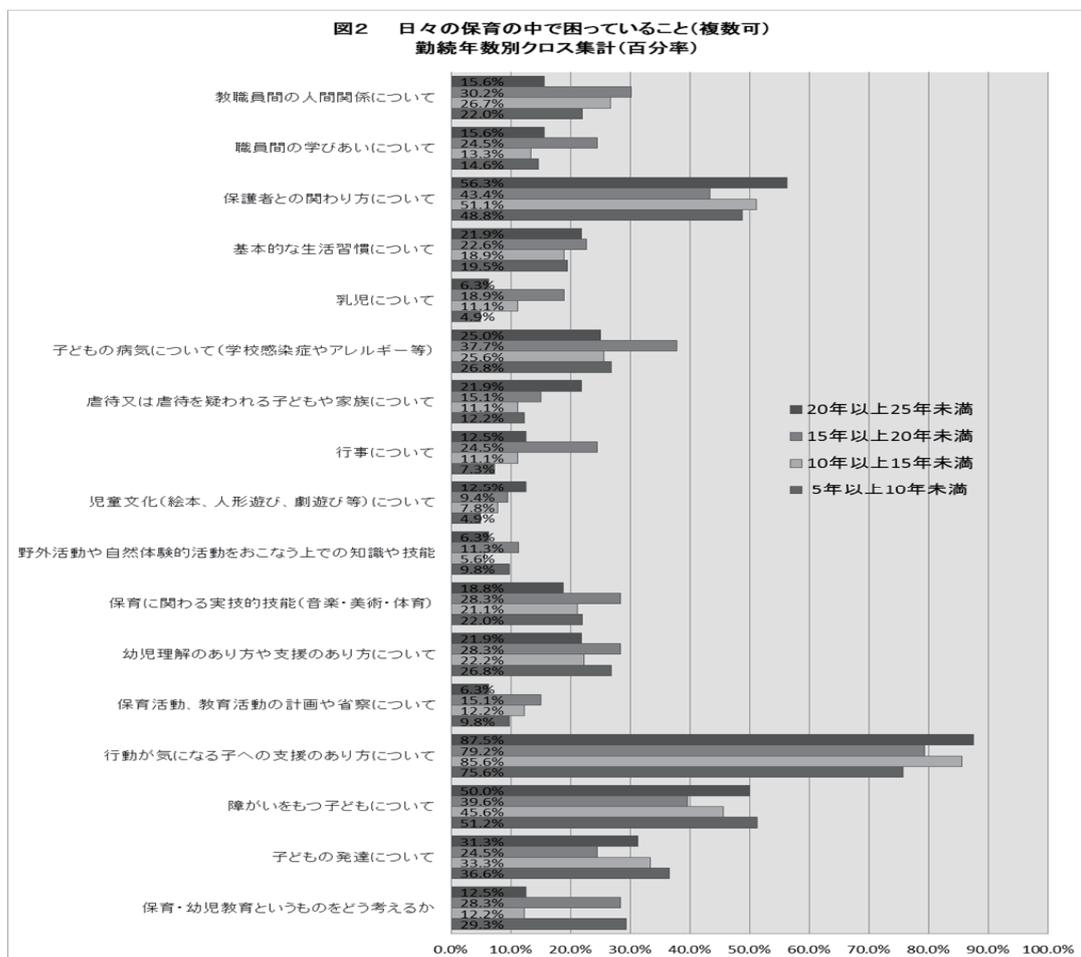
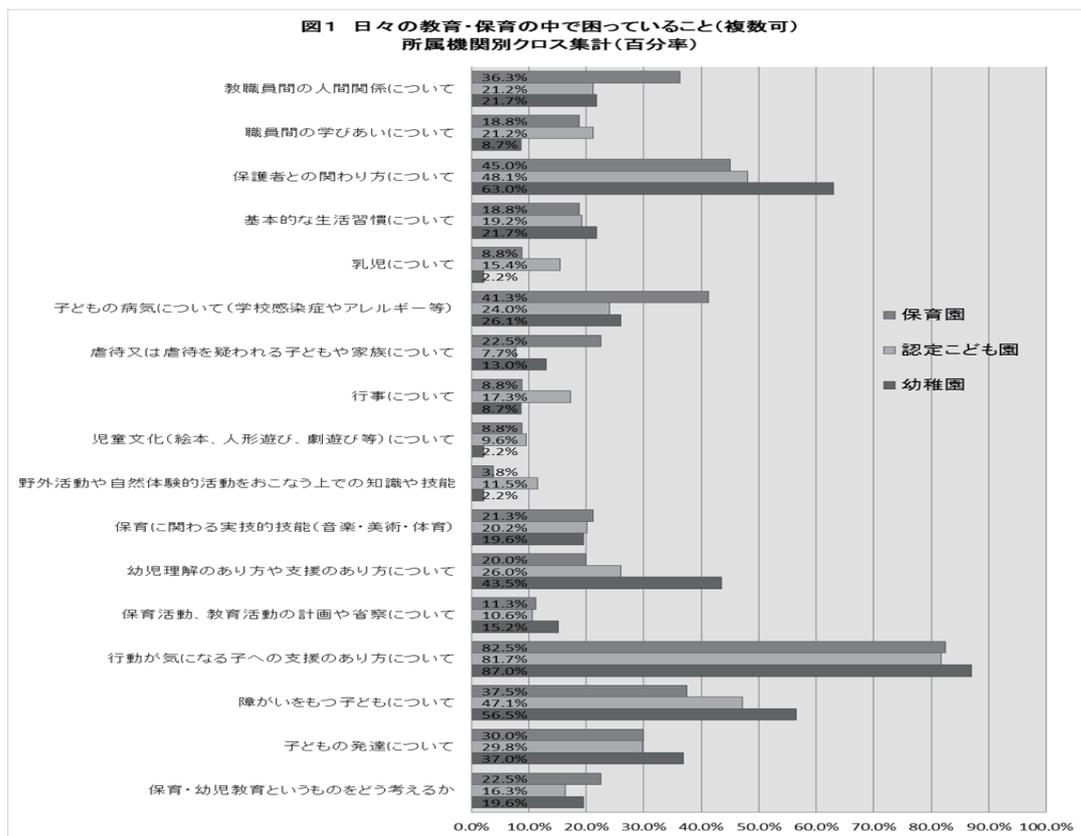
~10年:41名、10~15年:90名、15~20年:53名、20~25年:32名、)をクロス集計し百分率で示した。対象人数の少ない勤続年数は図としての表記からは除いた。図3は、役職・担当とのクロス集計であるが人数が少ない園長、副園長・教頭とその他、不明を除いた役職・担当(クラス担任:163名、主幹・主任:22名、フリー:38名)を比較した結果である。これらの結果から、『困っていること』でみられた特徴を以下に記す。

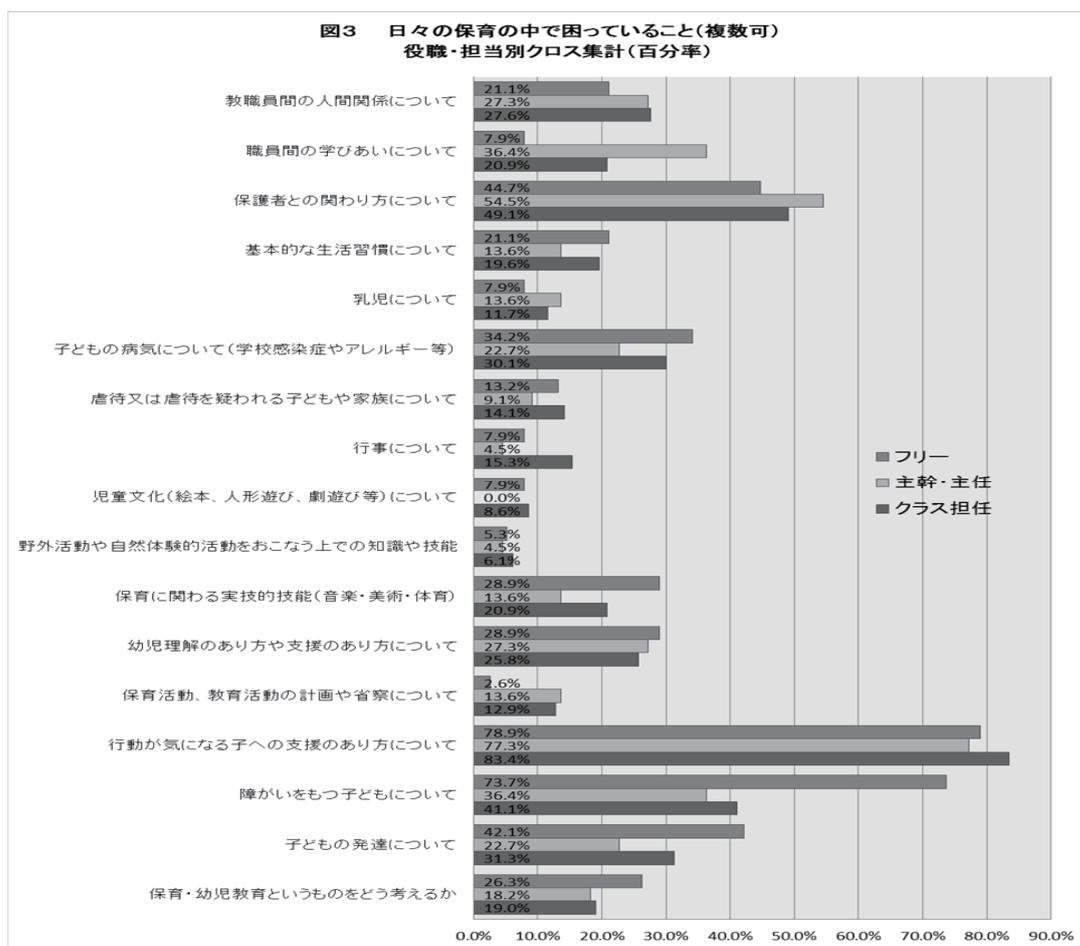
表2 日々の教育・保育の中で困っていること(属性別クロス集計表)

育英短期大学幼児教育研究所 アンケート  
クロス集計表(属性別)

回答者数 257名

	合計	2. 日々の教育・保育の中で困っていることについて(複数可)	保育・幼児教育というものをどう考えるか(それをふまえた実践のあり方について)	子どもの発達について	障がいをもつ子どもについて	行動が気になる子どもの支援のあり方について	保育活動の計画や書類について	幼児理解や支援のあり方について	保育に関する実務的技術(音楽・体育)	野外活動や自然体験の活動(音楽・体育)	児童文化(絵本、人形遊び、劇遊び等)について	行事について	虐待や疑われる子どもの対応について	子どもの乳児について(学校感染症やアレルギー等)	基本的な生活習慣について	保護者との関わりについて	職員間の関わりについて	教職員間の関係について	その他	不明
全体	257	50	80	117	213	30	69	54	18	19	33	36	75	26	49	126	44	63	7	2
性別	100.0%	19.5%	31.1%	45.5%	82.9%	11.7%	26.8%	21.0%	7.0%	7.4%	12.8%	14.0%	29.2%	10.1%	19.1%	49.0%	17.1%	24.5%	2.7%	0.8%
女性	249	45	76	115	207	28	65	51	17	18	32	35	74	25	49	124	42	63	7	1
100.0%	18.1%	30.5%	46.2%	83.1%	11.2%	26.1%	20.5%	6.8%	7.2%	12.9%	14.1%	29.7%	10.0%	19.7%	49.8%	16.9%	25.3%	2.8%	0.4%	
男性	4	3	3	2	3	1	1	2	0	1	0	1	0	1	0	2	2	0	0	1
100.0%	75.0%	75.0%	50.0%	75.0%	25.0%	25.0%	50.0%	0.0%	25.0%	0.0%	25.0%	0.0%	25.0%	0.0%	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	25.0%	
不明	2	0	0	0	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
100.0%	50.0%	25.0%	0.0%	75.0%	25.0%	75.0%	25.0%	25.0%	0.0%	25.0%	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
年齢	20代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
30代	111	25	38	50	88	15	24	22	7	6	13	14	36	10	24	55	14	33	1	1
100.0%	22.5%	34.2%	45.0%	79.3%	13.5%	21.0%	19.8%	6.3%	5.4%	11.7%	12.8%	32.4%	9.0%	21.6%	49.8%	12.6%	29.7%	0.9%	0.9%	
40代	102	16	29	49	91	9	33	21	6	9	12	16	25	11	21	52	21	21	4	0
100.0%	15.7%	28.4%	48.0%	89.2%	8.8%	32.4%	20.6%	5.9%	8.8%	11.8%	15.7%	24.5%	10.8%	20.6%	51.0%	20.6%	20.6%	3.9%	0.0%	
50代	41	8	11	17	31	5	11	10	4	3	7	6	14	4	4	18	8	8	2	1
100.0%	19.5%	26.8%	41.5%	75.0%	12.2%	26.8%	24.4%	9.8%	7.3%	17.1%	14.6%	34.1%	9.8%	9.8%	43.9%	19.5%	19.5%	4.9%	2.4%	
60代	46	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
不明	2	1	0	2	1	0	1	0	1	0	1	0	0	1	0	1	1	1	0	0
100.0%	50.0%	50.0%	0.0%	100.0%	50.0%	0.0%	50.0%	50.0%	50.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	50.0%	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%
所属①	公立	48	14	24	40	9	17	13	3	3	7	10	15	3	8	25	11	14	2	0
100.0%	25.0%	29.2%	50.0%	83.3%	18.8%	35.4%	27.1%	6.3%	2.1%	14.6%	20.8%	31.3%	6.3%	16.7%	52.1%	22.9%	29.2%	4.2%	2.1%	
私立	169	32	51	75	139	18	40	36	9	13	17	22	50	17	30	77	28	40	5	1
100.0%	18.9%	30.2%	44.4%	82.2%	10.7%	23.7%	21.3%	5.3%	7.7%	10.1%	13.0%	29.6%	10.1%	17.8%	45.6%	16.6%	23.7%	3.0%	0.6%	
不明	40	6	15	18	34	3	12	5	6	5	9	4	10	6	11	24	5	9	0	0
100.0%	15.0%	37.5%	45.0%	85.0%	7.5%	30.0%	12.5%	15.0%	12.5%	22.5%	10.0%	25.0%	15.0%	27.5%	60.0%	12.5%	22.5%	0.0%	0.0%	
所属②	幼稚園	46	9	17	25	40	7	17	6	12	4	6	12	1	10	29	4	10	2	0
100.0%	19.6%	37.0%	56.5%	87.0%	15.2%	43.5%	19.6%	2.2%	2.2%	8.7%	13.0%	26.1%	2.2%	21.7%	63.0%	8.7%	21.7%	4.3%	0.0%	
認定こども園	104	17	31	49	85	11	27	21	12	10	18	8	25	16	20	50	22	22	3	1
100.0%	16.3%	29.8%	47.1%	81.7%	10.6%	26.0%	20.2%	11.5%	9.6%	17.3%	7.7%	24.0%	15.4%	19.2%	48.1%	21.2%	21.2%	2.9%	1.0%	
保育園	80	18	24	30	66	9	16	17	3	7	7	18	33	7	15	36	15	29	0	0
100.0%	22.5%	30.0%	37.5%	82.5%	11.3%	20.0%	21.3%	3.8%	8.8%	8.8%	22.5%	41.3%	8.8%	18.8%	45.0%	18.8%	36.3%	0.0%	0.0%	
その他	8	1	2	3	7	1	3	0	0	0	0	0	3	1	3	4	0	1	0	0
100.0%	12.5%	12.5%	37.5%	87.5%	12.5%	37.5%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	37.5%	12.5%	37.5%	50.0%	0.0%	12.5%	0.0%	0.0%	
不明	19	5	7	9	15	2	3	5	2	1	4	4	2	1	1	7	3	1	2	1
100.0%	26.3%	36.8%	47.4%	78.9%	10.5%	15.8%	26.3%	10.5%	5.3%	21.1%	21.1%	10.5%	5.3%	5.3%	36.8%	15.8%	5.3%	10.5%	5.3%	
勤続経験年数	1年未満	1	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0
100.0%	0.0%	100.0%	100.0%	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%	0.0%	0.0%	
1年以上5年未満	13	1	3	4	12	4	4	2	0	0	3	4	0	3	6	1	3	1	3	1
100.0%	7.7%	23.1%	30.8%	92.3%	7.7%	30.8%	15.4%	0.0%	0.0%	0.0%	23.1%	30.8%	0.0%	23.1%	46.2%	7.7%	23.1%	7.7%	7.7%	
5年以上10年未満	41	12	15	21	31	4	11	9	4	2	3	5	11	2	8	20	6	9	1	0
100.0%	29.3%	36.6%	51.2%	75.0%	9.8%	26.8%	22.0%	9.8%	4.9%	7.3%	12.2%	26.8%	4.9%	19.5%	48.8%	14.6%	22.0%	2.4%	0.0%	
10年以上15年未満	90	11	30	41	77	11	20	19	5	7	10	10	23	10	17	46	12	24	0	0
100.0%	12.2%	33.3%	45.6%	85.6%	12.2%	22.2%	21.1%	5.8%	7.8%	11.1%	11.1%	25.6%	11.1%	18.9%	51.1%	13.3%	26.7%	0.0%	0.0%	
15年以上20年未満	53	15	13	21	42	8	15	15	6	5	13	8	20	10	12	23	13	16	3	0
100.0%	28.3%	24.5%	39.6%	79.2%	15.1%	28.3%	28.3%	11.3%	9.4%	24.5%	15.1%	37.7%	18.9%	22.6%	43.4%	24.5%	30.2%	5.7%	0.0%	
20年以上25年未満	32	4	10	16	28	2	7	6	2	4	4	7	8	2	7	18	5	5	2	0
100.0%	12.5%	31.3%	50.0%	87.5%	6.3%	21.9%	18.8%	6.3%	12.5%	12.5%	21.9%	25.0%	6.3%	21.9%	56.3%	15.6%	15.6%	6.3%	0.0%	
25年以上30年未満	8	3	2	5	8	0	5	0	0	0	1	2	1	1	3	2	2	2	0	0
100.0%	37.5%	25.0%	62.5%	100.0%	0.0%	62.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	25.0%	0.0%	50.0%	37.5%	25.0%	25.0%	0.0%	0.0%	
30年以上	9	2	2	3	6	3	3	2	1	1	1	1	4	1	1	3	2	2	0	1
100.0%	22.2%	22.2%	33.3%	66.7%	33.3%	33.3%	22.2%	11.1%	11.1%	11.1%	11.1%	44.4%	11.1%	11.1%	33.3%	22.2%	22.2%	0.0%	11.1%	
不明	10	2	4	5	8	1	3	1	0	2	1	3	0	1	6	1	1	1	0	0
100.0%	20.0%	40.0%	50.0%	80.0%	10.0%	30.0%	10.0%	0.0%	0.0%	20.0%	10.0%	30.0%	0.0%	10.0%	60.0%	10.0%	10.0%	0.0%	0.0%	
役職・担当	クラス担任	163	51	51	67	136	21	42	34	10	14	25	23	49	19	32	60	34	45	4
100.0%	19.0%	31.3%	41.1%	83.4%	12.9%	25.8%	20.9%	6.1%	8.6%	15.3%	14.1%	30.1%	11.7%	19.6%	49.1%	20.9%	27.6%	2.5%	0.6%	
園長	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0
100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	0.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	
副園長・教頭	2	0	0	2	1	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0
100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	50.0%	50.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	
主幹・主任	23	8	17	8	17	3	6	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
100.0%	18.2%	22.7%	36.4%	77.3%	13.6%	27.3%														





- 1) 保育・幼児教育というものをどう考えるか  
勤続年数5～10年の保育者の回答29.3%と、15～20年の回答28.3%が、それ以外の勤続年数の回答よりも高くなっている。
- 2) 子どもの発達について  
フリーの立場の保育者の回答が42.1%と高く、クラス担任が31.3%、主幹・主任が22.7%と役職・担当によって違いがみられた。
- 3) 障がいをもつ子どもについて  
フリーの立場の保育者の回答が73.7%、クラス担任が41.1%、主幹・主任が36.4%と役職・担当による違いがはっきりと出た。また、所属別では、幼稚園が56.5%と高く、次いで認定こども園47.1%、保育園37.5%となった。
- 4) 気になる子への支援のあり方について

どの属性においても高く、7割を超えた困り感がある。

- 5) 保育活動、教育活動の計画や省察について  
主幹・主任が13.6%、クラス担任が12.9%であり、フリーは2.6%と著しく低い。
- 6) 幼児理解のあり方や支援のあり方について  
所属が幼稚園の場合の回答が43.5%と最も高い。認定こども園の場合は26.0%、保育園の場合は20.0%と、幼稚園と他の2つの所属に大きな差が生じている。
- 7) 保育に関わる実技的技能(音楽・美術・体育)  
フリーの立場の保育者の回答が28.9%で、クラス担任が20.9%、主幹・主任が13.6%と違いがあった。フリーの立場の保育者が、保育に関わる実

技的技能に関して他の立場の保育者よりも困っている傾向がわかった。

#### 8) 行事について

勤続年数15～20年の回答が24.5%と他の勤続年数の回答よりも高かった。役職・担当としては、クラス担任が15.3%で他よりも高い傾向を示した。

#### 9) 虐待又は虐待を疑われる子どもや家族について

保育園の場合の回答が22.5%と他の所属機関よりも高い傾向を示した。

#### 10) 子どもの病気について（学校感染症やアレルギー等）

所属が保育園の場合の回答が41.3%と最も高い。幼稚園の場合が26.1%、認定こども園が24.0%と保育園との間に差が生じている。

#### 11) 乳児について

所属が認定こども園の場合の回答が15.4%、保育園の場合は8.8%、幼稚園の場合は2.2%と差がみられた。また、勤続年数別では、勤続年数15～20年の回答が18.9%と他の勤続年数の回答よりも高く、次いで勤続年数10～15年の回答が11.1%となった。

#### 12) 保護者との関わり方について

この項目はどの所属においても困り感が高いが、特に幼稚園が63.0%と高く、子ども園の48.1%、保育園の45.0%と差が生じている。

#### 13) 職員間の学び合いについて

主幹・主任が36.4%と高く、次いでクラス担任が20.9%と続く。フリーの立場の回答は7.9%と低い。また、所属機関別では、認定こども園（21.2%）と保育園（18.8%）が幼稚園（8.7%）よりも高い傾向を示した。

#### 14) 教職員の人間関係について

所属が保育園の場合の回答が36.3%と高く、幼稚園（21.7%）、認定こども園（21.2%）との間に差が生じた。

## 考察

『困っていること』に関するクロス集計の結果からは、属性ごとの保育者の抱えている課題や現場の状況が反映されていると言えよう。まず、所属機関別にみられた違いに注目すると、保育園においては、子どもの病気について、虐待又は虐待を疑われる子どもや家族について、教職員の人間関係についての項目で他の所属機関よりも困っている割合が高い傾向がみられた。保護者が働いているため子どもの病気に即座に対応することができず、結果として保育園で病気の子どもに対応する機会が多くなるという事情が考えられる。虐待に関する項目も、他の所属に比べると保育園においてはこの問題に直面する機会が多いという現状がうかがえる。教職員の人間関係について他の所属よりも困っているという結果に関しては、複数担任や勤務の交代など協働して働く機会の多さや雇用形態の多様化などの事情が反映されていると考えられる。これらの項目に関して、保育者が具体的にどのようなことで困っているかの更なる調査をし、課題点を明確にしつつ対策を考えていく必要性があろう。次に、幼稚園においては、幼児理解のあり方や支援のあり方について、保護者との関わり方についての項目で他の機関より高い傾向がみられた。幼児理解に関しての項目は、幼稚園の対象年齢が反映されているためと考えられるが、保護者との関わり方への困り感についてはその内実を調査する必要がある。認定こども園では、乳児についての項目が他の機関よりも高い傾向がみられた。これは認定子ども園への移行に伴い乳児の保育を担うことになった者の反応と考えられる。今後も、移行後の経過の中で顕在化してくる課題点や保育者の困り感についてみていくことが大切である。

次に、役職・担当別による違いに注目すると、フリーの立場の保育者は、子どもの発達について、障害をもつ子どもについて、保育に関わる実技的技能についての項目で他の保育者よりも困ってい

る傾向が高かった。それに対して、主幹・主任の立場の保育者は、保育活動、教育活動の計画や省察について、職員間の学び合いについての項目が高く、フリーの立場の保育者は著しく低かった。フリーの立場の保育者が、発達や障害をもつ子どもを担当することが多く、そこでの保育に関わる実技的スキルについて困っている現状があると思われる。また、主幹・主任は園での活動の計画を立てたり指導をする立場に立っていることが反映されているといえよう。担任はいずれの項目においてもその中間の困り感を示す結果となった。

勤務年数によるクロス集計からは、経験年数が少ないほど困る項目（例えば、子どもの発達について、幼児理解のあり方や支援のあり方について）と、経験年数が多いほど困る項目（例えば、保護者との関わり方について、虐待又は虐待を疑われる子どもや家族について、児童文化について）という大まかな傾向がみられる項目がある中で、勤続年数15～20年に当てはまる群がその傾向と異なる反応を示す項目もみられた。例えば、子どもの病気について、行事について、職員間の学び合いについてなどの項目が高く、保護者との関わり方について、子どもの発達についての項目などは低い傾向を示した。こうした独自の傾向は、この年代の保育者が、主任などまとめる役職に変わったり、子育て後に復帰したり、雇用形態が変わったりするなど、保育者としての働き方が転換する時期や、働き方の多様性が増す時期と重なることが影響しているのかもしれない。この時期の保育者の現状の詳細を考慮する必要もあるだろう。

今回の調査では、「行動が気になる子への支援のあり方」について日々困っているという回答が一番多く8割を超えた。クロス集計によるとこの困り感には、所属や勤務年数、役職・担当などの属性による違いはほとんどなく、どの属性においても7割以上が困っているという結果であった。またこの項目に関しては、次の質問『研修などで

学んでみたいこと』においても一番多く選択されており、そちらも8割を超えている。

「気になる子」という言葉が保育現場で注目されるようになったのは、2000年代に入り軽度発達障害がという言葉が登場し現場にも浸透してきたという背景が指摘されている。それ以降、「気になる子」に関しての研究や実践が重ねられているが、その定義は研究者や保育者の視点によって異なっており、ある保育者が気になっている子ども、他の保育者にとってはそうではないこともある。久保山（2009）は、保育者たちが「気になる子ども」という言葉をどのように使っているのかを理解し幅広く対応できる準備をしておかなければならない」と「気になる」という言葉の多義性を指摘している。また、大場（1993）は、専門家に「気になる子への支援の仕方的一般論を聞いても意味ない。安易にそれに頼ると関係によって起きている問題を子ども個人の問題にすりかえることになりかねない」と気になるという問題は関係性の問題が反映すると指摘している。さらに、目の前にいる具体的で独自のその子どもにどうかかわっていくかは、保育者それぞれのその子どもに対する理解にもとづく判断にゆだねられており、その子どもが育っていくことを可能にする力は、保育者たちと親たちと子どもたちがつくっている保育の場がもっていると論じている。保育現場の困り感を支援するには、保育者自身が抱える課題や姿勢を問いながら、深い子ども理解を支えることが重要であろう。

### 結果3. 研修などで学んでみたいことについてのクロス集計

前述の結果2と同様にクロス集計結果を示す（表3、図4、図5、図6）。これらの結果から、『研修などで学んでみたいこと』でみられた特徴を以下に記す。

表3 研修などで学んでみたいこと（属性別クロス集計表）

青英短期大学幼児教育研究所 アンケート  
クロス集計表(属性別)

	合計	(複数可)																		
		B. 研修などで学んでみたいことについて	保育・幼児教育とどう考えるか(それをふまえた実践のあり方について)	子どもの発達について	障がいをもつ子どもについて	行動が気になる子どもへの支援のあり方について	保育活動の計画や観察について	保育活動のあり方について	幼児理解や支援のあり方について	保育に関する技術(音楽・美術・体育)	野外活動や自然体験的活動(遊歩、園遊、おこなう上での知識や技能について)	児童文化(絵本、人形遊び、劇遊について)	行事について	虐待又は虐待を疑われる子どもや家族について	子どもの病気について(学校感染症やアレルギー等)	乳児について	基本的な生活習慣について	保護者の関わりについて	職員間の学びについて	教職員間の人間関係について
全体	257	58	94	154	211	31	74	95	34	62	29	40	82	36	38	110	37	37	5	2
性別	100.0%	22.6%	36.6%	59.9%	82.1%	12.1%	28.8%	37.0%	13.2%	24.1%	11.3%	15.6%	31.9%	14.0%	14.8%	42.8%	14.4%	14.4%	1.9%	0.8%
女性	249	55	90	150	206	29	70	93	32	58	28	38	82	34	38	108	36	37	5	2
女性	100.0%	22.1%	36.1%	60.2%	82.7%	11.6%	28.1%	37.3%	12.9%	23.3%	11.2%	15.3%	32.9%	13.7%	15.3%	43.4%	14.5%	14.9%	2.0%	0.8%
男性	4	2	3	2	0	1	1	2	0	2	0	2	0	1	0	2	1	0	0	0
男性	100.0%	22.6%	36.6%	59.9%	82.1%	12.1%	28.8%	37.0%	13.2%	24.1%	11.3%	15.6%	31.9%	14.0%	14.8%	42.8%	14.4%	14.4%	1.9%	0.8%
不明	4	1	1	1	3	2	3	2	2	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0
不明	100.0%	25.0%	25.0%	25.0%	75.0%	50.0%	75.0%	25.0%	50.0%	50.0%	25.0%	0.0%	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
年齢	20代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
20代	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
30代	111	28	40	67	91	16	29	43	17	29	13	19	42	13	18	50	13	16	1	1
30代	100.0%	25.2%	36.0%	60.4%	82.0%	14.4%	26.1%	38.7%	15.3%	26.1%	11.7%	17.1%	37.8%	11.7%	16.2%	45.0%	11.7%	14.4%	0.9%	0.9%
40代	102	22	40	64	89	10	31	36	11	24	10	15	31	19	18	46	14	13	3	0
40代	100.0%	21.6%	39.2%	62.7%	87.3%	9.8%	30.4%	35.3%	10.8%	23.5%	9.8%	14.7%	30.4%	18.6%	17.6%	45.1%	13.7%	12.7%	2.9%	0.0%
50代	41	8	12	21	28	4	12	16	5	9	6	8	3	4	2	14	9	8	1	1
50代	100.0%	19.5%	29.3%	51.2%	68.3%	9.8%	29.3%	39.0%	12.2%	22.0%	14.6%	14.6%	22.0%	9.8%	4.9%	34.1%	22.0%	19.5%	2.4%	2.4%
60代	1	0	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
60代	100.0%	0.0%	100.0%	100.0%	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
不明	2	0	1	1	2	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
不明	100.0%	0.0%	50.0%	50.0%	100.0%	50.0%	50.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	0.0%	0.0%
所属①	公立	48	12	17	27	38	9	19	21	8	6	11	14	7	5	25	5	7	2	0
公立	100.0%	25.0%	35.4%	56.3%	79.2%	18.8%	39.6%	43.8%	16.7%	16.7%	12.5%	22.9%	29.2%	14.6%	10.4%	52.1%	10.4%	14.6%	4.2%	0.0%
私立	169	37	63	105	140	19	44	59	20	46	20	28	60	22	23	67	27	22	2	2
私立	100.0%	21.9%	37.3%	62.1%	82.8%	11.2%	26.0%	34.9%	11.8%	27.2%	11.8%	16.6%	35.5%	13.0%	13.0%	39.6%	16.0%	13.0%	1.2%	1.2%
不明	40	9	14	22	33	3	11	15	6	8	3	1	8	7	10	18	5	8	1	0
不明	100.0%	22.5%	35.0%	55.0%	82.5%	7.5%	27.5%	37.5%	15.0%	20.0%	7.5%	2.5%	20.0%	17.5%	25.0%	45.0%	12.5%	20.0%	2.5%	0.0%
所属②	幼稚園	46	11	17	28	39	7	19	18	5	10	4	8	9	2	7	24	4	7	0
幼稚園	100.0%	23.9%	37.0%	60.9%	84.8%	15.2%	41.3%	39.1%	10.9%	21.7%	8.7%	17.4%	19.6%	4.3%	15.2%	52.2%	8.7%	15.2%	0.0%	0.0%
認定こども園	104	25	37	64	86	10	31	32	17	21	13	12	33	18	13	44	20	14	2	1
認定こども園	100.0%	24.0%	35.6%	61.5%	82.7%	9.6%	29.8%	30.8%	16.3%	20.2%	12.5%	11.5%	31.7%	17.3%	12.5%	42.3%	19.2%	13.5%	1.9%	1.0%
保育園	80	16	28	48	64	11	17	36	7	24	9	17	36	10	14	36	11	14	2	1
保育園	100.0%	20.0%	35.0%	60.0%	80.0%	13.8%	21.3%	45.0%	8.8%	30.0%	11.3%	21.3%	45.0%	12.5%	17.5%	45.0%	13.8%	17.5%	2.5%	1.3%
その他	8	1	3	3	7	1	3	4	0	2	0	0	3	2	3	2	1	2	0	0
その他	100.0%	12.5%	37.5%	37.5%	87.5%	12.5%	37.5%	50.0%	0.0%	25.0%	0.0%	0.0%	37.5%	25.0%	37.5%	25.0%	12.5%	25.0%	0.0%	0.0%
不明	19	5	9	11	15	2	4	5	0	5	3	3	1	4	1	4	1	4	0	1
不明	100.0%	26.3%	47.4%	57.9%	78.9%	10.5%	21.1%	26.3%	0.0%	26.3%	15.8%	15.8%	5.3%	21.1%	5.3%	21.1%	5.3%	0.0%	5.3%	0.0%
勤務経歴 年数	1年未満	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1年未満	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
1年以上5年未満	13	2	5	8	11	0	4	2	2	3	2	2	3	0	2	3	1	3	0	1
1年以上5年未満	100.0%	15.4%	38.5%	61.5%	84.6%	0.0%	30.8%	15.4%	15.4%	23.1%	15.4%	15.4%	23.1%	0.0%	15.4%	23.1%	7.7%	23.1%	0.0%	7.7%
5年以上10年未満	41	15	15	27	35	5	13	15	7	11	4	11	15	3	10	15	8	7	1	0
5年以上10年未満	100.0%	36.6%	36.6%	65.9%	85.4%	12.2%	31.7%	36.6%	17.1%	26.8%	9.8%	26.8%	36.6%	7.3%	24.4%	36.6%	19.5%	17.1%	2.4%	0.0%
10年以上15年未満	90	19	31	50	77	11	19	34	9	23	9	11	33	15	9	48	7	13	0	0
10年以上15年未満	100.0%	21.1%	34.4%	55.6%	85.6%	12.2%	21.1%	37.8%	10.0%	25.6%	10.0%	12.2%	36.7%	16.7%	10.0%	53.3%	7.8%	14.4%	0.0%	0.0%
15年以上20年未満	53	10	18	32	42	10	17	24	12	17	11	5	15	13	6	19	14	7	2	0
15年以上20年未満	100.0%	18.9%	34.0%	60.4%	79.2%	18.9%	32.1%	45.3%	22.6%	32.1%	20.8%	9.4%	28.3%	24.5%	11.3%	35.8%	26.4%	13.2%	3.8%	0.0%
20年以上25年未満	32	5	15	20	27	2	9	12	7	2	7	2	7	4	8	15	3	3	1	0
20年以上25年未満	100.0%	15.6%	46.9%	62.5%	84.4%	6.3%	28.1%	37.5%	6.3%	21.9%	6.3%	21.9%	31.3%	12.5%	25.0%	46.9%	9.4%	9.4%	3.1%	0.0%
25年以上30年未満	8	2	2	5	5	0	5	2	1	0	0	1	3	1	2	3	2	0	1	0
25年以上30年未満	100.0%	25.0%	25.0%	62.5%	62.5%	0.0%	62.5%	25.0%	12.5%	0.0%	0.0%	12.5%	37.5%	12.5%	25.0%	37.5%	25.0%	0.0%	12.5%	0.0%
30年以上	9	1	1	4	4	2	2	3	1	1	0	1	1	0	4	1	2	0	1	1
30年以上	100.0%	11.1%	11.1%	44.4%	44.4%	22.2%	22.2%	33.3%	11.1%	11.1%	0.0%	11.1%	11.1%	0.0%	44.4%	11.1%	22.2%	0.0%	11.1%	11.1%
不明	10	4	6	7	9	1	4	2	0	1	2	0	2	0	1	3	1	1	0	0
不明	100.0%	40.0%	60.0%	70.0%	90.0%	10.0%	40.0%	20.0%	0.0%	10.0%	20.0%	0.0%	20.0%	0.0%	10.0%	30.0%	10.0%	10.0%	0.0%	0.0%
役職・担当	クラス担任	163	34	56	97	140	23	45	65	25	44	23	56	27	26	71	24	24	4	1
クラス担任	100.0%	20.9%	34.4%	59.5%	85.9%	14.1%	27.6%	39.9%	15.3%	27.0%	14.1%	16.0%	34.4%	16.6%	16.0%	43.6%	14.7%	14.7%	2.5%	0.6%
園長	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
園長	100.0%	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
副園長・教頭	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0
副園長・教頭	100.0%	0.0%	0.0%	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%	0.0%
主幹・主任	22	4	6	10	15	5	4	9	3	4	2	2	6	4	6	10	9	4	0	0
主幹・主任	100.0%	18.2%	27.3%	45.5%	68.2%	22.7%	18.2%	40.9%	13.6%	18.2%	9.1%	9.1%	27							

図4 研修で学んでみたいこと(複数可)  
所属機関別クロス集計(百分率)

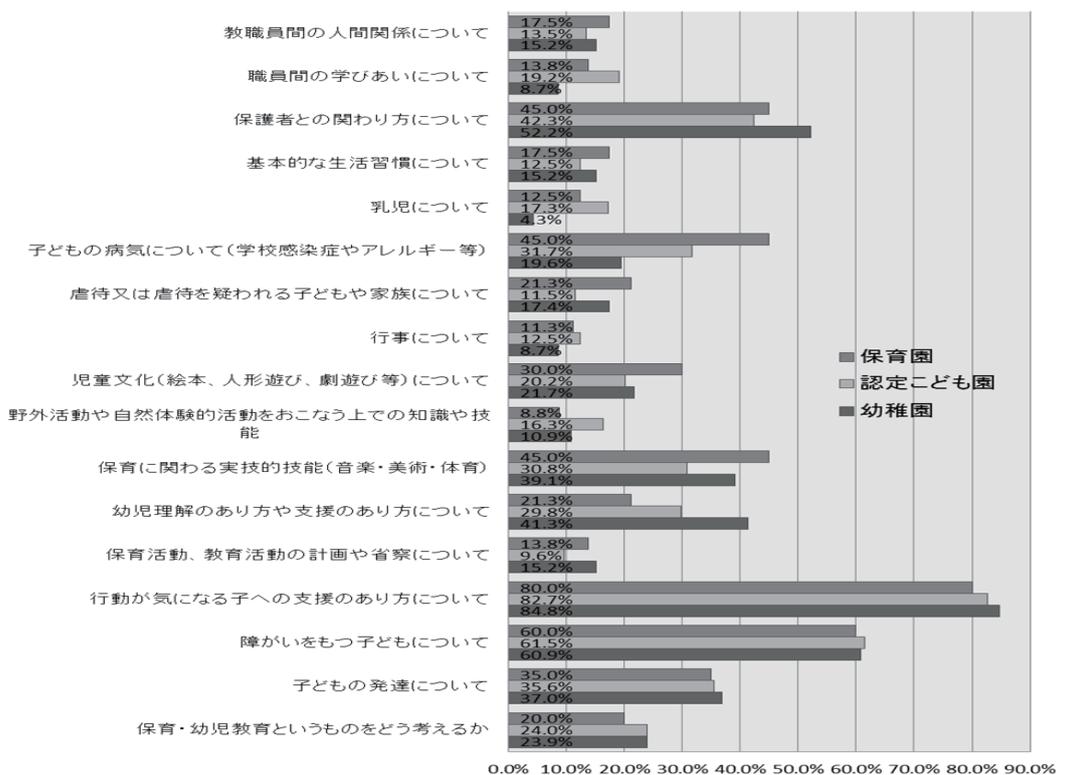
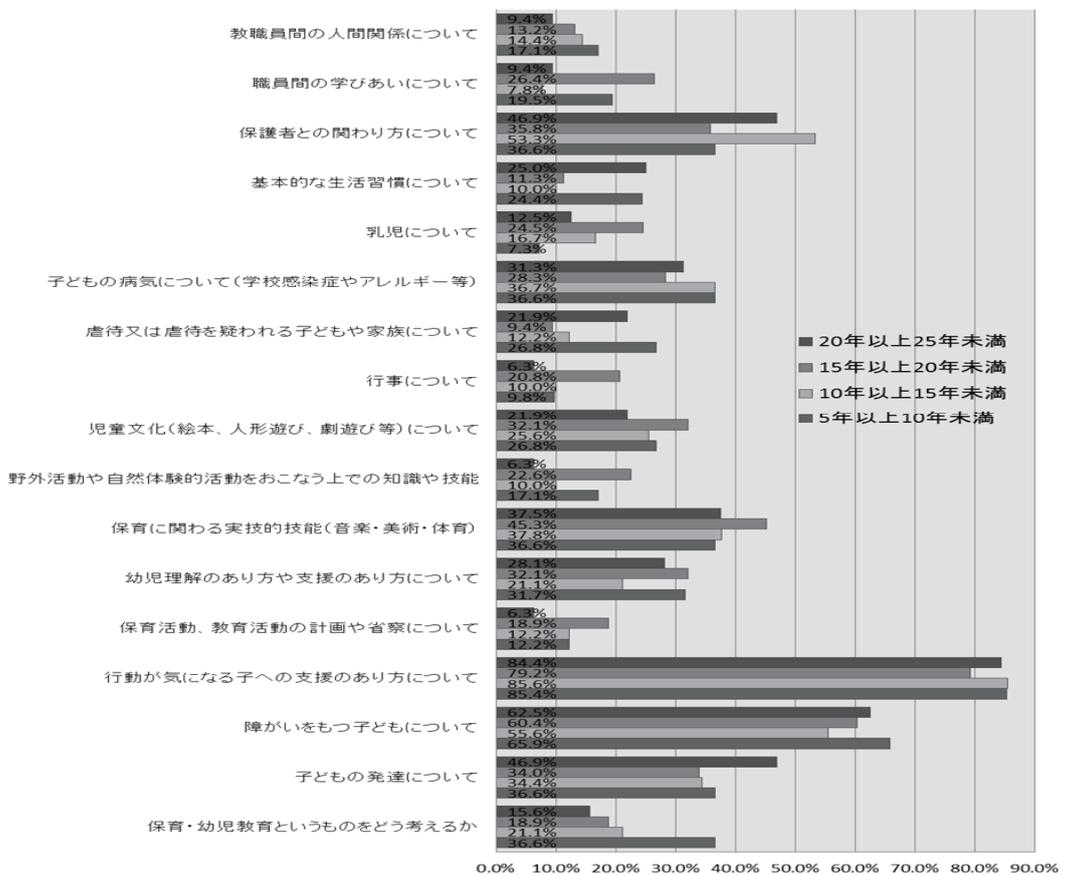
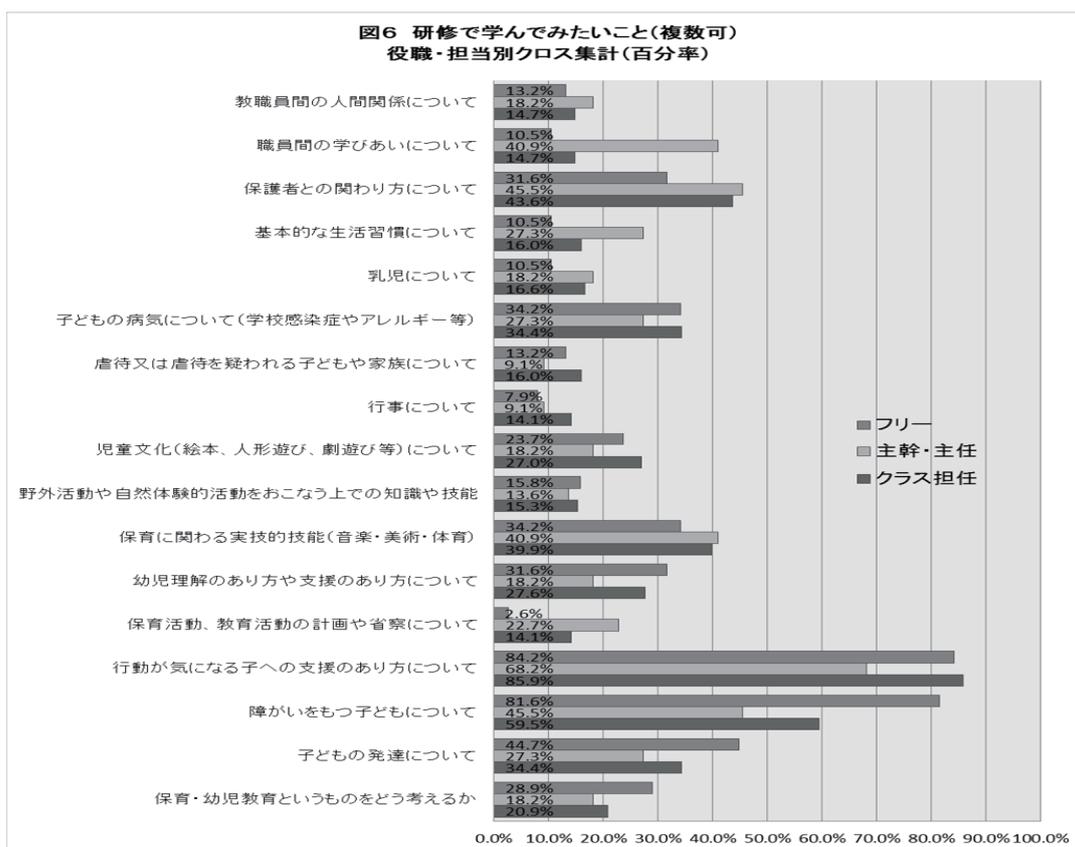


図5 研修で学んでみたいこと(複数可)  
勤続年数別クロス集計(百分率)





1) 子どもの発達について

30代の保育者の回答が36%及び40代が39.2%に対して、50代が29.3%となっている。また経験年数が1～25年の保育者の回答が34%～38.5%及び20～25年の回答が46.9%に対して、25～30年が25%、30年以上は11.1%とかなり低くなっている。クラス担任の回答が34.4%、主幹・主任が27.3%に対してフリーの立場の保育者の回答が44.7%と高くなっている。

2) 障がいをもつ子どもについて

主幹・主任が45.5%、クラス担任が59.5%、フリーが81.6%と立場による違いがはっきりと出た。

3) 保育活動、教育活動の計画や省察について

主幹・主任が22.7%と最も高く、クラス担任が14.1%、フリーは2.6%と著しく低い。

4) 幼児理解のあり方や支援のあり方について

所属が幼稚園の場合の回答が41.3%と最も高い。認定こども園の場合は29.8%、保育園の場合は

21.3%と、幼稚園と保育園では大きな差が生じている。

5) 子どもの病気について(学校感染症やアレルギー等)

所属が保育園の場合の回答が45.0%と最も高い。認定こども園の場合は31.7%、幼稚園の場合は19.6%と、保育園と幼稚園では大きな差が生じている。

6) 乳児について

所属が保育園の場合の回答が12.5%、認定こども園の場合は17.3%、幼稚園の場合は4.3%と、幼稚園が著しく低い。

7) 基本的な生活習慣について

主幹・主任が27.3%と最も高く、主任が16.0%、フリーは10.5%とやや低めとなっている。

8) 職員間の学び合いについて

30代が11.7%及び40代が13.7%に対して、50代が22.0%とやや高くなっている。また経験年数に

においても1年以上5年未満が7.7%、5年以上10年未満が19.5%、10年以上15年未満が7.8%に対して、15年以上20年未満は26.4%と高めの結果が出ている。

## 考察

### 1) 子どもの発達について

50代以上・25年以上の経験者に比べて30代・40代で経験年数が25年未満の保育者の方が発達について学んでみたいという傾向が高い可能性がある(25年以上のサンプル数が17と少ないことから本研究では有意な差があると断定はできない)。

かつての日本には画一化した適応主義的な考えのもと、子どもの内面にあまり目を向けられない時代があった。昭和30年代の学校工場方式などがその代表例であろう。もしその考え方の名残が影響しているのであれば、子どもの主体的な育ちという観点から考えるならばあらためていかなければならない重要な課題である。

またクラス担任や主幹・主任に比べてフリーの立場の保育者の回答が高くなっているのは、より発達に課題を抱える子どもをフリーの立場の保育者が担当しているケースが多いからではないだろうか。

### 2) 障がいをもつ子どもについて

いずれの立場においても他の項目と比べて高い関心もたれているテーマであることが明らかになった。特にフリーの立場の保育者の回答が高いのは、障害をもっている子どもをフリーの立場の保育者が担当しているケースが多いからではないだろうか。

### 3) 保育活動、教育活動の計画や省察について

主幹・主任が最も高いのは、主幹・主任は全体の計画を自ら立案したり、また他の立場の保育者と一緒に立案したり指導する立場であるためと考えられる。一方、フリーの立場の保育者の回答が著しく低いのは、クラスや園全体の保育計画の立案に関わるケースが少ないからではないだろうか。

### 4) 幼児理解のあり方や支援のあり方について

幼稚園に所属している保育者の方が保育園に所属している保育者よりも関心が高いといえよう。その理由については本研究では詳しく調査していないので結論を述べることはできない。今後の課題としたい。

### 5) 子どもの病気について(学校感染症やアレルギー等)

保育園の方が幼稚園に比べて著しく高い結果となっているのは、保育園は保護者の仕事等の都合で、病気が完治していなくても登園するケースが幼稚園よりも多いからではないだろうか。

### 6) 乳児について

幼稚園が著しく低い数値となっているのは、乳児がいないケースが多いことを鑑みれば当然の結果であろう。

### 7) 基本的な生活習慣について

主幹・主任が最も高いのは、主幹・主任はベテラン(経験25年以上、50代)の割合が高いことも関係しているのではないだろうか。立場ごとの違いが1)の「子どもの発達について」と逆の傾向が出ている。基本的な生活習慣についての指導ということが、画一化した適応主義と同化してはならないということを意識し、子どもの内面の発達をふまえた生活力の育成という観点で研修をおこなっていく必要がある。特に自閉症の場合、環境の調整が、発達のスモールステップを考慮すると必要な場合が多い。研修を企画・運営する上で、また研修会の講師等を務める養成校の教員としては留意しなければならない点であろう。

### 8) 職員間の学び合いについて

50代及び経験年数が15~20年の保育者と比べると、30代・40代及び経験年数が15年未満の保育者の数値が低くなっている。大枠的な表現をすると比較的若い保育者の方が職員間の学び合いについてあまり積極的ではない傾向があるといえる。

特別支援学校において、近年、若い教員が子どものことを職員室で他の教員と議論しなくなった

という話を度々耳にする（特別支援学校は複数担任制のため通常学校と比べると子どもについて、教員間で意見交換がおこなわれる傾向が高い）。理由の一つには様々な業務による多忙化（作成しなければならない書類の増加、保護者対応の増加等）により、子どもの話を同僚とする時間的・体力的・精神的余裕がなくなったという面がある。一方で、議論をしたがらない若い教員が増えているという声も聞く。それが本当であるとしたら、なぜ話したがらないのか、学び合おうとしないのか、その教員や保育者の立場に立って考えるところからはじめることも必要ではないだろうか。複数の目で、子どもの発達を丁寧に見ていくことは、質の高い保育・幼児教育の保障には欠かせない。話し合える、話そうという気持ちになる職場環境や研修を作っていくことが必要である。

## 総合考察

### －特別支援教育と通常の関係の視点から－

特殊教育から特別支援教育への転換がおこなわれ、これまでの特殊な場での教育から特別な教育的ニーズに応じた支援をあらゆる場所でおこなっていく教育という考え方へと大きな転換がはかられた。通常のクラスや園の中に、特別な支援を要する子どもが入り学ぶことがこの転換により大幅に増えた。

ここで考えなければならないことが「通常」と「特別」の関係である。「特別」はどのように決まるのか。何が「特別」かは、「通常」がどうあるかによって決まる。それに関して、あるエピソードを記す（小林・栗山、2016）。

『ハルクンは小児ぜんそくで入院していますが、年長さんが毎年行っている行事「お泊り会」に参加できるようになりました。病棟保育士が入院前の幼稚園と連携を取って、主治医の協力のもと一時退院の時期を調整してくれたのです。アレルギーとなるものについて、しっかりと幼稚園に事前に伝えました。幼稚園では、利用するレストラン

や宿にもそれを伝え、アレルギーの入った食事の提供がないように準備をしました。ハルクンは「そばアレルギー」をもっています。毎年利用している宿の枕が「そば殻の枕」を使っているということで、ハルクンは「別室で就寝」ということになりました。』

「別室での就寝」という特別な対応をおこなったということである。しかし、「通常」を変えることはできなかったのか。そば殻ではない枕を子どもの人数分そろえることができる宿であれば、「別室での就寝」という特別な配慮は必要なかったであろう。つまり、特別な支援の第一段階は、懐の深い通常創造ということである。それがどうしても難しい場合に限り、特別さが見える特別な配慮をおこなうのである。

このような視点から本研究の結果を考察してみると、発達に課題の多い子どもや障がいをもつ子どもを主に担当することの多いフリーの立場の保育者が「保育活動、教育活動の計画や省察について」参加度が低いという結果が表れたことは、保育現場における「特別」と「通常」の関係についての認識が、上記の認識とは異なっていることを懸念せざるをえない。

既決の「通常」があり、その「通常」に入ることが難しい「特別な子ども」に「特別な保育者（フリーの保育者）」がつくことで、その「特別な子ども」の担当は「特別な保育者」であり、その「特別な子どもと保育者」がクラス全体のあり方や園全体のあり方の変容のきっかけとなることはないという、「特別」と「通常」の間に壁がありはしないだろうか。様々な特別が特別に見えない懐の深い通常創造のためには、特別な教育的ニーズをもつ子どもを主に担当する保育者も全体の計画や省察に関わり、また全体を見る立場（園全体ということであれば主幹・主任、クラス全体ということであればクラス担任）の保育者も特別な教育的ニーズをもつ子どもの内面的な発達について理解を深める必要がある。

そのような研修、特別と通常の関係についての理解を深める研修の必要性を、今回の結果を省みることで強く認識した。そうでなければ「障がいをもつ子どもについて」の研修意欲は非常に高い結果となっているが、何処まで経っても「特別な別の世界のこと」という枠から抜け出すことはできないであろう。特に障がいをもつ子どもの中で幼稚園・認定こども園・保育園に最も多い発達障がいをもつ子どもは、環境との関係性の障がいであるともいわれている。それにも関わらず環境が固定化され既決のものとして扱われ、適応主義的な教化を強いられた場合には、発達的には促進どころか大きな問題を新たに生じることになりかねない。

文部科学省も平成31年度より大学・短期大学で教員免許を取得する場合、全ての教員免許において「特別支援教育」の授業を必修科目とするという方針を打ち出した。特別な配慮が必要な子どもは「特別な場」や「特別な担当者」という考え方ではなく、「通常」の状態のあり方を考えなければならぬというインクルーシブな発想からの制度改革である。

保育者養成校の教員として、特別支援教育の理解を進める一端を担う者として、この懐の深い通常の創造への支援は大きな課題であり責務であると捉えている。

#### IV. おわりに

さて、平成30年度から実施される新しい幼稚園教育要領が公示となった。平成28年8月における次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめにおいて、幼児教育部会のポイントでは新制度が実施されることにより、「幼稚園等を通じて全ての子どもが健やかに成長するよう、質の高い幼児教育を提供することが一層求められていること」が課題に挙げられている。学校教育の一環としての幼稚園のみならず、保育所、認定こども園を含めた全ての施設全体の質の向上を図っていくこと

が必要となっている。

これは昨今の子育てを巡る環境が変化し、幼稚園等に求められる役割が拡大・多様化することによってどう対応するかということに他ならない。「社会に開かれた教育課程」をどう具体的に実現できるのか。園・家庭・地域社会はそう遠くない過去では三角形でそれぞれが結ばれるイメージであった。しかし、多様化が進む地域社会の様相に以前のような粘着力が発生しにくい状況となっていることから、園の機能に教育センター的な役割がますます介入しつつあるのが現状である。新制度が定着し始めたと言え、事務レベルでの暗中模索の部分もまだまだあり、制度に人が追い付いていくのがやっとなのである。しかし、子どもにとって、保育の質を向上させるとなると保育現場の毎日はQ&Aに頼るわけにはいかない。有効な手立てとなるであろうことを仮説立て、あるいは可能性を導く手段を想定しながら、保育の循環をPDCAに乗せていく英知が求められる。これこそ、教員ひとり一人の研修の成果や教材研究の充実など、質向上のための環境づくりを目指す認識を高めたい。

まして、センター的役割が一層求められるにつれ、コンサルテーションとして幼児教育や保育の専門性を伝える情報力、心理・小児保健をはじめ地域の保育アドバイザー等との連携協力、小学校教員と実践面での共感的理解も重要となっている。抽象的な表現にならざるを得ないが、保育の質の大部分を成す教員集団に課せられた「多様化への対策を質の高さで均衡させる能力」ともとれる。さらに言い換えれば、組織を形成するのは個人であり、幼稚園等におけるカリキュラムマネジメントも園全体で実施運用する意識を実務経験の多少にかかわらず共有したいものである。それを実現していくための基盤こそ教員間の支持的な雰囲気作り（倫理的風土）であろう。

今後ますます、園内のリーダー的存在への期待が大きくなることは避けられない。但し、キャリアは生きものであり、常に力動的かつ周囲への共

感的な働きでリーダーシップは経験年数の枠を超えて発揮できる可能性を含むと思われる。

今回のアンケート調査をベースに、現状と課題について論じてきたが、実践と研修の積み重ねの在りようで10年ごとの振り返り地点では、キャリアによる色の違いが浮き彫りにされるであろう。免許更新講習とほぼ連動する、これまでの幼稚園10年経験者研修は、平成29年度より幼稚園等中堅教諭資質向上研修として名称変更し、内容的には30年度から見直しとなる。多様性の時代であり、専門的キャリア支援がワークライフバランスを含め、柔軟性を持ってリーダー創出に効果を発揮してもらえることを願う。

## 引用・参考文献

- 小林徹・栗山宣夫編著 2016 ライフステージを見通した障害児の保育・教育 pp. 235 みらい
- 大場幸夫・山崖俊子編 1993 保育臨床心理学 ミネルヴァ書房
- 幼児教育の現状と課題 一次期幼稚園教育要領改訂の方向性について― 2016 文部科学省初等中等教育局視学官 湯川秀樹 第37回全幼研経営研修会講話資料 平成28年11月12日
- 幼児教育をめぐる情勢と今後の課題 2017 文部科学省初等中等教育局幼児教育課長 伊藤学司 群馬県私立幼稚園・認定こども園協会第二次設置者・園長研修会資料 平成29年2月22日